

# 人類労働学会 会報

第73号

1996年5月1日

事務局 〒216 川崎市宮前区菅生2丁目8番14号

(財)労働科学研究所内  
TEL. (044) 977-2121

## 1995年度夏季研究会

### 過疎地で過疎を考える

— 星と山の静けさの中、村のお年寄りと和尚さんを囲んで —

1995年の人類労働学会夏季研究会は、長野県短期大学・人間工学研究室の大橋信夫、下平佳江、ゼミ生の皆さんのお世話により、8月24日、25日に長野県のまんなかで開催された。

ところ：長野県上水内郡中条村

8月24日13:00。長野駅前集合。村営バスで中条村役場へ。中条村の概要をうかがう。

14:00から白沢宣子さんのツバメのいえ・ミニマト・水田・オリンピック道路・村営住宅、海沼もとみさんの山田畑の見学ののち、宿泊地梅木鉾泉保養センターやきもち家へ。

夜：白沢、海沼さんと小泉住職のお話ののち、いりり端で談話会が朝まで続いた。

8月25日未明より：そば打ち、おやき作り実習。現地解散。自転車でゆく人、車でゆく人、バスで行く人。空青く、杉木立色濃く、長野市のほんの郊外ながら豊かな里を後にした。

## エルゴロジーとは臨界体力学と見つけたり

加藤 哲郎 (一橋大・政治学)

「過疎地で過疎を考える」—そんなテーマに魅かれて、人類労働学会の催しに初めて参加した。なにしろ私の専門は政治学、過労死研究の過程でエルゴロジーという視角に関心を持ち入会したもの、なかなか参加する機会がなく、もっぱら会報会員だった。過疎問題ならちよっぴり専門とも交錯する



海沼さんの山の田畑をめざして。

ので覗いてみたのだが、面白い体験だった。素材は長野県中条村、人口3千人の山あいの高齢化社会。といっても車なら長野まで20分、農地は急傾斜の段々畑で自立経営は難しい。観光での村おこしにも中途半端である。立派な小・中学校に県立中条高校まであるが、若者は長野へ東京へと去ってゆく。そんなおばあちゃん中心の「一ちゃん農業」の実態と、そこでがんばる人々の体験を聞くのは有益だった。

圧巻は夜の学習会と懇談会。白沢さん、海沼さん、小泉和尚さんの話で、教育に熱心な信州の伝統をかいまみた後、地酒と手作りの山菜に囲まれた喧々がくがく。神奈川大・長野県立短大の学生たちがつぶれた後も、さまざまな専門を持つ勤態学者たちは、過疎と農と自立をはばむ官僚政治・企業社会を肴に、朝7時まで徹夜で議論していた。こちらはエルゴロジーとはサーカディアン・リズムにそったライフスタイルと了解していたので、2時前に温泉に入り床に就いたが、どうやら勤態学とは、体力と知力の限界に挑戦し見究める実践的学問だったようだ。

比較政治学的にみて、日本は企業社会での長時間労働が地域社会・家庭での公共時間・自由時間を圧迫し、それが日本の民主主義と市民社会の水準を規定していると考えてエコロジー＝生態学とエルゴロジー＝勤態学に近い私としては、初めて勤態学者たちの勤態学的観察の機会を得た。昨年『国民国家のエルゴロジー』（平凡社）という本を出し、今夏は『エルゴロジーの21世紀へ』（仮題、花伝社）という日本過労死社会分析を執筆してきたが、大きな星を眺め、囲炉裏を囲んで自然科学と社会科学の接点を考える貴重な体験となった。

最後に、すべてを手際よくセットしてくれた長野県立短大の大橋先生・下平先生、ご苦労様でした。

#### 「過疎地で過疎を考える」夏季研究会に参加して 丸小野 敦子 (West Virginia 大)

自然には恵まれているのに、アメリカの経済発展から意図的に取り残され、貧困、過疎、教育レベルの低下等に悩むWest Virginia州。〔雰囲気が信州に似た所だよ〕と聞いてWest Virginiaへの留学を決意し地理学を学ぶに至った私にとって、今回の研究会に参加させて頂いた事は、非常に勉強になりました。

澄みきった空気と豊かな自然の中、美味しい野菜

をご馳走になり、ゆったりとした時間を過している、こんな素敵な所なのに人々は何故、中条村から出て行ってしまおうのだろうかと感じます。ともすると過疎の問題が、単なる人々の価値観の変化によるものと錯覚しがちです。ところが問題の本質はそんなセンチメンタルなものではなく、〔もう農業では食べて行けなくなった〕という紛れも無い事実にある。国策の誤りこそが、村に残りたくても残れない状況を作り出したのだという事を、白沢さん、海沼さん、小泉さんのお話により、改めて認識させられました。

また、私は〔一体、社会の力構造におけるどの部分にいる人が、世の中の不合理や不平等を改革して行くパワーを持っているのだろうか〕と考え込む事がよくあるのですが、今回、中条村の老人福祉充実への動き、その経過を伺って、何か非常に説得力のある事例を見せて頂いた気がしています。白沢さん、海沼さんのような、思慮深さ、柔軟性、そして行動力に富んだ個人個人の力と、それらが連帯してこそ生まれるパワー。それを村という行政側が汲み上げて行く。小泉さんのような、村民の側に立って、その意志の実現化を推し進めて行く、温かくも頼もしい橋渡し役無しでは、成し得なかったことだと思います。市民自治のあるべき姿を見た気がしました。

白沢さんは、夜の懇親会の席で、私なんて本当に井の中の蛙で…と謙遜していらっしゃいました。ですが、この諺には〔大海を知らず〕の後に〔天の深さを知る〕と続く、という説もあるのだそうです。私はこの説が何だか好きなのですが、清い水の湧き出る井戸の中で、世の中の湖沼河川が汚染されて行く様を憂い、生命の水の尊さを歌い続ける2匹の蛙が白沢さんと海沼さん（勝手にすみません）。その声に耳を傾け、大切な水の有効利用と井戸の保持に全力を注ぐ和尚さん…そんな図が浮かんできました。

東京で生まれ育ち、物事を深く考えるゆとりすら持たずに来た私。せめてW. Vaで、できる限り、尊い蛙の声を聴くことができたらと思っています。

#### 人類勤態学会夏季研究会に参加して

三井 智子 (長野県短大・人間工学)

私は、当然のことですが、この研究会に初めて参加しました。行く前々から、大橋先生に、この研究会に来る人は皆しゃべりたくて来るような人たちだよ、と聞いていました。ですからとても楽しみにし